



【2018-04-04】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週の雑感

『書き替えは日本社会
の文化？』

長野修二

書き替えは日本社会の文化？

書き替えは日本の文化のようなものでしょうか。

企業においても決裁の書き替えは普通におこなわれています。

とくに決裁申請用紙（稟議書）を紙仕様で使っている企業では、簡単に書き替えがおこなわれます。

データ印などを使用して日付を特定していますが、書き替え時には、そのデータ印の日付を戻すだけです。

このような対応は、日本企業のいたるところでみられるのではないのでしょうか。

私が経験した企業では、2社を除いて書き替えがおこなわれていましたし、決算書も多くの企業で書き替えられて銀行や税務署へ提出されていました。

大体、書き替えを前提としてそれぞれの企業は、いろいろなルールを勝手に変更しているのが日本の経営者の実情でしょうか。

中小企業に限らず上場企業でもおこなわれているものです。

経理や会計システムでも伝票の書き替えが簡単にできるのですから、経営者が恣意的に書き替えることなども簡単です。

上場企業の中でも電子決裁システムを運用して改ざんができないようにしている、あるいは会計システムでも自動採番して伝票にロックがかかっており修正や改ざんなどできないようにして運用している企業では、決裁書や経理伝票などの改ざんはできませんが、このようなシステムで運用していないベンチャー企業などでは経営管理全般に注意が必要です。

株式上場を目指している企業でも経営管理システムについて私が経験した範囲では、経営者の意識はかなり低いものでした。

売上や利益だけに注力し、経営の根幹であるお金の流れを適正に把握する努力をしているのは一握りの経営者でした。

経営管理に関してそれなりの指摘をして対応できる経営者は10人に一人くらいでしょうか。

だいたい経営管理に関してきちんと取り組めない経営者が経営する企業は、その後、なんらかの問題を起こし、それなりの結末を迎えました。

それが経営の原理原則でしょうか。

国における決裁の修正や改ざんなども、実態からすれば過去から継続的におこなわれていたのではないのでしょうか。

内部通報などの制度や情報社会における情報秘匿のむずかしさから今般の事件のように外部に出てきたというのが真相でしょう。

それでも釈然としないものを感じますが、なにやら国がやっていることにも信頼がおけないことが多かったのかもわかりません。

経営管理と同様に、適正に業務を処理していくためには電子決裁などのシステムを導入していないことにも驚きましたが、改ざんできない仕組みをまず構築するしかありません。

それでも決裁申請を処理するのは人間ですから、その内容を意図的に変更して書き込めばその内容は実態と大きく違ったものとなります。

そのために複数のチェックが必要になります。

いわゆる内部けん制をかけることですが、不正をしにくい仕組みをはじめから導入しておくことが肝要です。

それでも抜け穴を探して不正をやる人間はいますので、内部監査の体制を実行力あるように構築しなければなりません。

これも属人的な日本企業は不得手です。

現在では添付資料なども電子決裁と同時に処理できるのですから、このような体制をはやく築かなくてはなりません。

それにしてもこの国の管理に対する意識の低さは、国全体であり、ひいては国民全体の課題なのかも知れません。

この頃は高見の見物になっておりますが、本来、むかしから情けない社会だったのでしょう。

長い時間軸でみてもあまり社会の在り方が変わっていないと思うのは、私だけでしょうか。

企業の側で努力しても変わらない根本的な原因は日本人自身にあるのかもわかりません。

過去の実務における自らの至らなさを感じる今日このごろですが、

3社目となるまじめな企業が現れるかもわかりません。
少し期待しいたところです。